

内間土建

新型重機をお披露目

国内初仕様のロングブーム・アーム採用

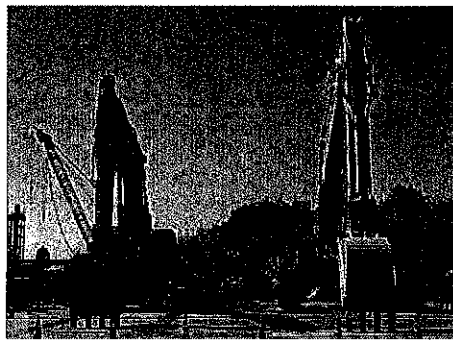
（内間土建（内間司代表取締役社長）は8月2日、

糸満市西崎町のヤードで、

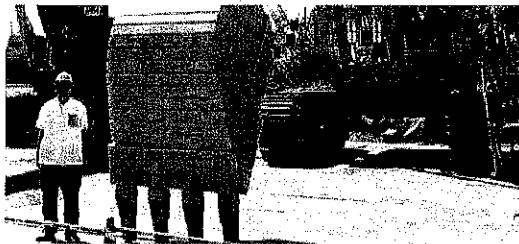
8をお披露目した。

PC1250-8はコマツ製のバックホー。内間土建ではこれまで使用していたPC1000の老朽化に伴い、新たに導入した。

導入にあたっては、浚渫工事等での使用にあわせてブームとアームの長さを変更。ブームは標準9・1mから11・0m、アームは標準3・4mから6・4mへとオーダーメイド。この仕様は国内でも製作例がなかったことからコマツ社で製作が行われた。ブームとアームの変更により浚渫深さは標準マイナス9m対



左が旧型機のPC1000で右が新型機のPC1250。ブームとアームが大型化したことが分かる



新型機のバケット部の横に立つ内間社長

応がマイナス11mまで対応可能となったほか、耐海水仕様（浚渫仕様）として機体の防錆塗装なども行われた。海上工事用だとキヤタピラのある足回りを除して、上部旋回体を台船に固定した仕様も多いが、可搬性や自由度などを考慮して足回りを取り付けたほか、海中の掘削などに対応するブレーカー装着も想定し、必要な配管なども装備している。

端末に施工箇所の設計データなどの情報をリアルタイムで表示が可能になるほか、施工履歴のデータ化などで施工効率も向上している。

また、機体にはコマツのICT装置「スマートコンストラクション・レトロフィット」を装着してデジタル化も図った。PC1250と同装置の組み合わせは国内でも初めての事例で、同装置の3D-ガイダンス機能によりタブレット

内間社長は「新型機はこれまでに使っていたものより大型化し、納品まで1年くらいかかったが、ブームとアームを長大化したことでより深い浚渫が可能になった。新型機とセットで施工を行う台船も改装中で、機材が揃い次第、現場に投入していく。多くの離島を抱える沖縄県では様々な条件での海上工事に対応することが求められるので、新型機でそれらのニーズに対応したい」と述べた。